

TDK株式会社の、現金、貸付金、及び有利子負債の抜粋(2013年3月末日の個別貸借対照表より)

現金及び預金	47億円			
関係会社短期貸付金	528億円		短期有利子負債合計	2,126億円
関係会社長期貸付金	2,432億円		長期有利子負債合計	840億円
合計		3,007億円	合計	
			2,966億円	



左右の比較が大切ですが、
黒矢印の左右の比較は
相対的に重要ではありません。
赤矢印の左右、そして、
青矢印の左右、
の比較が一番重要です。

TDK株式会社は”実質無借金”の状態を目指すとの事ですが、手元資金が有利子負債を上回る状態、すなわちこの場合、 $(現金及び預金 + 関係会社短期貸付金 + 関係会社長期貸付金) > (短期有利子負債合計 + 長期有利子負債合計)$ の状態を目指すというだけでは長期的には資金は安定しません。長期的な資金の調達・運用のバランスの安定化が目標なら、単純な実質借金状態を計算するのではなく、**短期資金と短期資金**、**長期資金と長期資金**のバランスを考えるべきです。すなわちこの場合、

現金及び預金と関係会社短期貸付金の合計額と短期有利子負債合計額はバランスが取れている(赤い矢印)のか、そして、**関係会社長期貸付金と長期有利子負債合計がバランスが取れている(青い矢印)のか、**に重点を置いて、長期的な資金計画を立案していくべきです。

もちろん、”実質無借金”状態であるに越したことはありませんし、手許現金量は多いに越したことはありませんが、例えば、このたびのTDK株式会社のように、既に”実質無借金”状態であるにも関わらず、現金及び預金と関係会社短期貸付金の合計額よりも短期有利子負債合計額がはるかに多い、というアンバランスな状況が現に起こっているわけです。

この抜粋貸借対照表は、1,551億円もの現金が今まさに不足している状態であることを示しているわけです。

短期有利子負債合計は1年以内に返済をしなければならない金額を表します。

一方、関係会社短期貸付金は1年以内に回収可能な金額を表します。

売掛金や未収入金や棚卸資産等、そして、買掛金や未払金や預かり金等、

他にも考慮しなければならない勘定科目はありますが、この場合は、

貸付金と有利子負債が金額面でのインパクトが一番大きいことは貸借対照表を見れば分かります。

TDK株式会社の貸借対照表は、TDK株式会社が1年以内に資金がショートすることを示しています。

流動負債は1年以内に返済や決済をしなければならない金額を表し、

流動資産は1年以内に回収が可能な金額を表します。

流動資産は必ず流動負債を上回っていなければなりません。

それが流動比率の意味です。

貸借対照表から判断する限り、TDK株式会社は1,551億円もの現金が不足しています。

この貸借対照表が正しいのなら、TDK株式会社は1年以内に、すなわち、2014年3月末日までに、必ず倒産します。